



ジェミニ・マーメイド

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

前編 海の底のファンタジア

後編 人魚姫の冒険

★タップすれば各章へジャンプします

前編 海の底のファンタジア

「このお、甘えんじやねえよ」

沼沢君雄は、足元にじやれついできた野良犬——と言ってもまだ小犬だ——を、酔いにまかせて蹴飛ばし

た。

「キヤイン……」

犬はひとこえ鳴いたが、どうやら捨てられたばかりで、まだ人間というものを信じているらしく、きよとんとした表情で君雄を見上げた。

「あっちいけよ、ばーか」

君雄が脅しても、犬はいっこうに逃げようとしなない。それどころか、遊んでくれているとでも思ったのか、

尻尾を振りはじめると、しまつた。

「お前な、いい加減にしろよ、シツ！」

君雄はそう言つて、手に持っていたビール缶を振りかざした。

と、そのとたん、中に残っていたビールが、みごと頭上に降り注いだ。

「うひゃ」

髪とシャツがびしょ濡れだ。

「……ワン」

犬は、それを見て、うれしそうに吠えた。

「……なんだよお」

真夜中の商店街。酒屋の自動販売機の青白い光の中で、ビールを浴び、小犬をにらみつけている自分が、君雄はいよいよ惨めに思えてきた。

「そんなに……おかしいかよ」

酔っ払った君雄は、ついに、へなへなとへたりこん

だ。その目がやたら充血しているのは、もちろん、ビールがしみているせいばかりではない。

「けつきよく、タイプじゃなかったのよ、私たちって」
数時間前、夜の街を歩きながら、小池有香は、信じられないくらいいさっぱりと、そう言った。

（もう少し言い方ってもんがあるだろうが。泣けとは言わないけど……。）

君雄はそう思ったが、口には出さなかつた。

「一年前は二人とも錯覚しちやつてたのよね。受験終わって、東京へ出てきて、開放感もあつたし。それに、二人とも失恋したばっかりだったし。で、すぐにあんなことになつちやつてさ」

「……うん」

「ばつかみたい。それで、恋愛関係しなきゃいけないような気がして、一年間、なんだか気まずい思いしな

がら会ってたんだから」

（：：そんなことない。うまくいった時だっているんだ）

君雄は内心そう思ったが、やはり黙っていた。今さら何を言っても、有香には通じないだろう。

「これからおんなじ大学通ってるわけだし、顔合わせたら気軽に声を掛け合えるような、そんなふうになろうね」

「……いいお友だちでいましょうね、ってか。女って、まったく……」

君雄は、夜道をふらふらと歩きながら、胸に抱いた小犬に話しかけた。

「そうかそうか、お前も寂しいのか」

小犬が甘えるように喉を鳴らしたので、君雄はそう言った。

(：：：しかし、なんか僕、典型的失恋男やってんな)
夜風のせいで少しばかり酔いが醒めた君雄は、立ち止まると、はじめてまわりをきよろきよろと眺めた。

「：：：で、どこなんだ、ここは？」

大学のある駅から二つ目、つまり自分のアパートの最寄り駅で、私鉄の最終を降りただけはまちがいない。でも、すぐには帰る気がせず、酔いにまかせてふらふらと歩き、途中、また何度か、自販機でビールを

買って飲んだ。それで、この小犬と一戦交えて……。

「なんだ。まるつきり逆方向じゃんか」

そこはもう大学に近い町だった。

君雄は大きくため息をついたが、すぐ何かを思いついたらしく、小犬に向かってつぶやいた。

「……そっか。ここなら、早坂んところが近いんだ」

すでにおわかりだと思いが、沼沢君雄クンは地方出

身の大学生。と言っても高校は名古屋だから、そんなに田舎から出てきたわけではない。家族は今でも、名古屋近郊のベッドタウンに住んでいる。サラリーマンの父と専業主婦歴二二年の母。それに、二つちがいの弟がひとり。そんな典型的核家族が、彼の育った家庭環境のすべてである。

一年と少し前、第二志望だった今の大学に合格した君雄は、初めて親元を離れて上京し、ひとり暮らしを

始めた。

大学があるのは東京都下。二三区内の人間には、都内とは思われていないような場所だが、それは大学が十何年か前に移転した結果であって、一流とは言わな
いまでも、名前を言えば全国どこへ行っても通る有名私大ではある。

現在彼は、その教養部二年。彼女にふられたばかりの、いわばどこにでもいる大学生だ。

「二時半か、もう寝てるだろうな」

早坂智志さとしのマンションのある路地にさしかかって、

君雄は腕時計を見た。

「ま、いつか。たたき起こせば」

路地の中ほど、敷地いっぱいを使ったその細長い五階建ては、各階が二部屋ずつ。外見だけで、単身者用のワンルーム形式だということがわかる。

下まで来て見上げると、四階の智志の部屋だけに明かりが点いていた。

「お、ラッキー」

君雄は小犬を抱いたまま、メールボックスの並んだ入口を通り、奥の、狭いエレベーターの箱に入った。

四階の踊り場に降りると、二つ並んだドアの一方のインターホンを押す。

「ピン・ポーン」

一瞬、室内が静まり返ったのが外からでもわかった。それまでは、確かに人の気配がしていたのが、チャイムと同時に、ぱたりとやんだのだ。

君雄は、インターホンから、すぐに智志の声が聞こえてくるものと思った。

しかし、いくら待ってもインターホンは何の反応も示さない。

君雄は首をかしげ、もう一度ボタンを押してみた。

それでも、智志は返事をしなかった。

君雄はしかたなく、インターホンに口を近づけ、自分の方から言った。

「早坂、起きてる？　僕。沼沢」

部屋の中で何かが動く気配がした。

つづいて、床を歩くスリッパの音が聞こえ、やっと返事が帰ってきた。

「どうしたの？　こんな時間に？」

「わるい。泊めてくれない？」

また少し、空白の時間があつた。智志は何か迷っているようだった。

「……いいけど。ちよつと、待ってて。部屋かたづけ
るから」

そのあと、部屋の中で、ばたばたと忙しく動きまわる音が聞こえ始めた。

「なんなんだ。女の子でもあるまいし」

君雄は、そうひとりごとを言って、また小犬の頭を撫でた。

君雄と智志は学科がちがう。しかし、教養部のうちは同じ講義を受けることも多く、入学当初から顔は知っていた。

もつとも、マンモス大学で、お互いすぐ顔を覚えたのには、他にもちよつとした理由があった。

（なんか、僕そっくりな感じの奴だな）

第二外語としてとったドイツ語の最初の講義で智志を見かけ、君雄はそう思った。一瞬にして、そう感じるくらい、智志は自分とよく似ていたのだ。

だいいちに、体つき。君雄の身長は、一六〇センチに数ミリ足りない。手足は長いが、やせていて骨格も華奢だ。

智志も同じような体型をしていた。

さらに、二人を決定的に似させていたのは、その顔の印象だった。にきびなどなく、肌がつるんとしていて。男の子にしては頭が小さくて、そのぶん、相対的に目鼻立ちが大きく見えるところもそっくりだった。

ちがいと言ったら、君雄の方が、メタルフレームの眼鏡をかけているということくらいだ。

（なんか、やだな……）

君雄は、その時、そう思った。単に自分に似ている

から、というだけではない。自分がふだん嫌悪していること——子供っぽくて、男らしくないと感じる特徴を、智志が、まるで鏡に映したように持っていたからだ。

だから君雄は、いっしょになる講義でも、なるべく智志の近くには座らないようにした。

そんな君雄が、智志と言葉を交わすようになったのは、じつは、一年の時だけある体育の時間：：と、こ

う書くと、スポーツで意気投合したのかと思われそうだが、実際はまったく逆。二人とも運動がまるでダメだったからだ。

大学の教養部の体育など、遊びのようなもの。だが、二人とも、その時間がいやだった。テニスにしてもバスケットにしても、はしやぎまわる級友を前に、二人は、コートの際の方で小さくなっていた。いつしか、お互いのそんな様子に気づき、どちらからともなく、

うまくサボることに協力し合ったりするうち、二人は最も親しい友人になっていたというわけである。

智志の出身は、新潟県。なんでも、地元財界の名士の息子らしい。

それは、智志の部屋からもおおよその察しはついた。二三区外とはいえ、都内の新築マンション。十畳ほどの広さで、バストイレ、エアコンつき。床はフローリングされ、オープンキッチンまでついている。とても

一般サラリーマンの子息が住めるものではない。

もつとも智志には、金持ちの息子にありがちな不遜なところはみじんもなかった。押しつけがましくなく、親切で優しい。育ちのよい素直な性格だ。

そんなところが、みんなにも好かれ、友人も多かった。君雄ももちろん、そんな智志のことを気に入っていたのだ。

けつきよく君雄は、外で十分以上待たされた。その間、部屋の中では、絶え間なく動く気配がしていた。

不思議だったのは、ひきだしやクローゼットをさかんに開け閉めする音や、さらにはシャワーの音まで聞こえたことだ。

散らかったゴミや雑誌や食器をかたづけろにしては、おかしなことだった。

鍵とチェーンロックの音がして、智志はやっとドア

を開けてくれた。

「ごめん、待たせちゃって」

智志は、玄関に入る君雄に向かって、どこか照れたような笑顔でそう言った。

「迷惑だった？」

「ううん。そんなこと、ないけど……」

ジーンズにトレーナー姿の智志は、妙にさっぱりしたきれいな顔をしていた。その上、髪まで濡れている。

（やっぱりさっきのは、シャワーを浴びる音だったんだ。それにしても、変なやつ……）

君雄がそう思いながら靴を脱いでいると、智志が弾んだ声で言った。

「かわいい。どうしたの、それ？」

君雄が抱いている小犬のことだった。

「え？　ああ、いくら追っ払ってもついてくるから：

」

「ふーん、おいで」

智志はそう言っつて、小犬を君雄の手から抱きとつた。その時、君雄はなにか妙な違和感を感じた。

ちようど顔の前に来た智志の白いうなじから、鼻をくすぐるような香りがしたのだ。どうも、シャンプーやリンスの匂いではないようだった。

君雄が解せない表情のまま、ライティングテーブルの椅子に腰掛けると、犬を抱いてオープンキツチンの

所まで行った智志は、皿を用意し、そこに冷蔵庫から出した牛乳を注いだ。

小犬は、床に置かれた皿に飛びつき、すごい勢いでなめ始めた。

「お腹、減ってたんだ」

智志は、そのそばにしやがみこみ、しばらく犬を見ていた。

(こいつって……、妙に、かわいいな)

君雄は、なんとなくそう感じた。犬のことではない。智志のことだ。

君雄がそう思ったのは、先刻の匂いとも相まって、智志の体から発散する「なにか」を感じとったからにちがいがなかったのだが、その時はまだ、それ以上のことを考えたわけではない。

やがて智志は立ち上がり、また、冷蔵庫を開けた。

「なんか、飲む？」

「うん、ビール」

君雄が答えると、智志は、クアーズの缶をそこから投げてよこした。そのあと、自分のぶんも一缶取って、ソファベッドに腰掛けた。

「……どうかした？」

君雄の顔を見て、智志が言った。

「え、うん、ちよつとね」

「そうか。小池さんに、ふられたんだ」

「えっ。……わかる？」

「そりゃ、こんな夜中にしよんぼりと小犬を抱いてやって来れば、だいたいの察しはつくよ」

「そうか……。そうだな」

それからしばらく、二人は黙ってビールを飲んだ。

智志があれこれ聞いたり、慰めたりしないことが、君雄には心地よかった。

智志は、こんなふうに優しいのだ。

しばらくして、ビールの缶を不思議そうに眺めながら、智志が言った。

「なんか、このビール、臭わない？」

「え？　：：：そう？」

君雄も自分の缶を見たが、すぐにその理由がわかって、答えた。

「あ、僕の臭い。さっき、ビールかぶっちゃったんだ」

「ふふ。シャワー、浴びたら」

智志は、そう言いながら、ソファを立った。

「そうだな」

君雄も、笑いながら立ち上がった。べつに何があつたわけでもないのだが、智志のおかげで、失恋の痛手を忘れられた気がした。君雄は、やはりここに来てよかつたと思つた。

「これに着替えなよ。下着も、僕のでよかつたら」

智志はそう言いながら、チェストからパジャマとズ

リーフを出してくれた。

「ああ、ありがとう。いいの？」

「かまわないよ、べつに。へんな病気、ないでしょ」

「ばーか」

「脱いだのは、洗濯かごの中に入れて。あとで洗うから」

そう言われて、君雄は、バスルームに入った。

着ていた綿シャツとチノパンを脱ぎ、そこに置かれ

た全自動の洗濯機のかごに入れた。そのあと、下着も脱いで、かごに入れようとし、手を止めた。

（そうか。べつに奴に洗ってもらわなくても、今、自分で洗えばいいんだ。）

君雄は、そう考え、洗濯機のかごを開けた。

（……えっ？）

手に持ったブリーフを放り込もうとした瞬間、君雄の目にすでに洗濯槽の中に入っていたものが飛び込ん

できた。

：：白い薄布。細いストラップのついたそれは、どう見てもスリッパだった。そして、その下からのぞいている淡いピンクの下着は：：ブラジャー。

君雄は見てはいけないものを見た気がして、あわててふたを閉じた。

(：：でも、なんで?)

しばらく呆然としていたが、とりあえず、シャワー

を手にとり、コックをひねった。

(どういうことなんだ?)

シャワーを浴びながらも、君雄は考えつづけた。

そして、あることに思い至った。

(:::そうか。女がいたんだ。)

先刻、ドアの外で長時間待たされたこと。その間、部屋の中でばたばたと気配がしていたこと。時ならぬシャワーの音。そして、この下着。それらすべてのこ

とが、そう考えると説明がついた。さつき智志の体から漂ってきたのは、たぶん、女の化粧のうつり香だ。

（どうやら僕は、まずい時に来ちゃったらしいな。早坂は女の子とナニの最中だったんだ。それで、あわてて……。それだったら、僕なんか、追い返したってかまわなかったのに。ふふ、……。まったく、……。律儀な奴。）

しかし、不思議なこともあった。

その女の子は、いったいどこへ消えてしまったんだろう。ひとつしかかない入口には、ずっと君雄が立っていたし、窓から逃がすにしても、ここは四階だ。

（もしかしたら、クローゼットの中に？）

だとしたら、こうして君雄がシャワーを浴びている最中、このドアの向こうでは、面白い光景が展開しているはずだ。智志は、たぶん泊まるつもりでいた女の子に、必死に謝って帰ってもらっているにちがいない。

女の子は、当然ながらふくれているだろう。

（まったく、なんて奴だ。僕を帰す方がラクなのに。

僕が失恋したと知って、帰せなくなつて、それで、パジャマまで出してくれたりして。）

君雄は半分面白がりながらも、智志に対してすまな
いと思った。せめてもとという思いから、シャワーをゆ
つくりと浴び、智志が面倒なことをすませる時間をか
せいでからバスルームを出た。

「沼沢君って長風呂なんだ。シャワー浴びながら寝ちやったのかと思ったよ」

パジャマに着替えて出てきた君雄に、小犬を膝に抱いた智志は、何事もなかったかのように言った。小犬は、満腹したらしく、すやすやと眠っている。

「……ふっ」

君雄が、つい吹きだしてしまったので、智志は怪（け）訝（げん）な顔をした。

「……なに？」

「早坂、お前も馬鹿だよね」

「え？　どうしたの？」

「女の子がいたなら、そう言えばいいじゃん」

「ん？　どういう……」

智志は、そこまで言って、なにかに気づき、目を泳がせた。

「あ、……もしかして、洗濯機の中？」

急に落ちつきなくなつた智志を見ながら、君雄は面白そうにうなずいた。

色白の智志の顔が、真つ赤になつた。

「凶星かな？　で、彼女はまだあのクローゼットの中？

それとも、今、帰つたばかり？」

「い、いや、そういうことじゃ……」

「いいっていいって。べつに隠さなくても」

「……だから、そんなんじゃ……」

「そんなにうるたえることないじゃん。お前が秘密にしときたいんなら、僕は誰にも言わないよ」

「そうじゃないって……。あ、そういうことにしといた方が……」

「なに言ってるの、お前」

智志があまりに狼狽しているので、君雄は、これ以上からかうのも悪いような気がしてきた。

「……つまり……、あの、さあ……」

「わかったわかった。もういいよ」

君雄がそう言っても、智志はまだ動揺しているようだった。おたおたした末に、ついには、しよんぼりとうつむいてしまった。

しばらく沈黙がつづいた。

なにか考え込んでしまった智志に対し、今度は君雄の方が気まずくなった。

「ごめん、からかったりして。もういいじゃん」

君雄が言うのと、智志は、小犬の毛並みを撫でながら、目を上げずに言った。

「沼沢君、……誰にも言わない？」

「だから、言わないって言ってるだろ」

「……僕のこと、軽蔑したりしない？」

「なんでよ？ そりゃ、僕もお前も二十歳までには数カ月あるけど、未成年はエッチしちやいけないなんて、おばさんみたいなこと、僕、思っていないよ」

「いや、そうじゃないんだ。君だから言うんだけど：
：、それ聞いたからって、僕のこと、避けたりしない
でほしい。人から見ればちよつと：：異常かも知れな
いけど、僕自身は、そんなにいけないことだと思つて
ないから：：」

「だから、いけないなんて：：」

「ううん。沼沢君、誤解してるんだよ」

「：：？」

「あの下着……、僕のなんだ。さっきまで、僕が……
つけてたの」

「……えっ？」

「趣味なんだ。……女装」

智志の言葉に、君雄は息を飲んだ。その口調から、
それが冗談ではないことはよくわかった。

「僕のこと、……嫌になった？」

「い、いや……」

それだけ言うのがやつとだった。

「……気味悪いよね、きつと」

智志は、小さく言って、さらにうつむいた。

そのまま、無言の時間がつづいた。

（たぶん、僕がなにか言わなければいけないんだろう
な）

立ったまま、智志を見おろし、君雄は思った。でも、
何をどう言ったらいいのかよくわからない。

智志は、無言で、寝ている小犬の背を撫でていた。

数分間、智志のそんな姿を見ているうちに、君雄の気持ちの中に余裕が生まれてきた。と同時に、智志のことが、なんだかいじらしくも思えてきた。

（ごまかそうと思えばごまかせたのに、こいつ、正直だから……。たぶん、他人にそんなこと言うのは、すごく恥ずかしいことにちがいない。こいつはさつき、

「君だから言うけど」って言ったよな。僕のことを信

用して、言いたくない秘密を、しゃべったんだ)

長い沈黙を破って、君雄が聞いた。

「下着……だけなの？」

「……え？」

智志は、その言葉にやっと顔を上げた。

「いや、つまり、その……、女装って、どんなふうにかなと思って」

「あ、……ううん」

智志は真っ赤になって首を振り、またうつむいて言った。

「……女の子の服を着て、お化粧もして……」

「へえ……」

そのあと、また少し間があった。そしてまた、君雄が口を開いた。

「よし、こうしよう。早坂、お前が女の子になったところ、僕に見せてよ」

「えっ？」

智志は驚いて、君雄の顔を見た。

「……そんな」

「いや、からかってんじゃないんだ。そりゃ、さつきは驚いたけど、落ちついて考えてみると、べつに悪いことしてるわけじゃないもんな」

「……僕は、そう思ってるよ。だけど、君の前でなんて……」

「いや、考えてもみてよ。たとえ頭でそう思ったとしてもさ、僕にとっては異次元の世界だろ。お前から、そんなこと聞いちやって、これから僕、どうしたらいいの。偏見持っなって言われたって、あれこれ想像だけはしちやうじゃない。そしたらなんか、これからお前とまともな友だちづきあいできなくなりそうじゃない。それくらいだったら、今、この目ではつきり見て、納得しといた方がいいと思うんだ」

智志は君雄を、少し驚いたように見つめた。

「沼沢君、なんか……、すごく、優しいね」

「馬鹿。そういうこと、言うか？　いいから用意しろ

よ。僕はどうしてたらいい？　部屋の外へ出るか？」

「ううん、いい。アコーデイオンカーテンあるから。

……だけど、恥ずかしいな……」

「もう遅い。男だろ。覚悟決めろよ。僕の方も覚悟して待ってっから、せいぜい美人になって出てこい」

君雄はそう言うと、智志を立たせた。

智志の膝から放り出された小犬が、きよとんと目を開けた。

三十分くらいは待っただろうか。

その間、君雄は妙に落ちつかなかつた。テーブルの上の雑誌をぱらぱらめくったり、迷惑そうにしている小犬をおもちやにしたり……。

女装が趣味だという智志のことを認めてやろうと、ああは言ったものの、正直なところ、なんだか、恐かった。

もし、智志の姿が気味悪いものだったらどうしよう。それでも、なに食わぬ顔ができるだろうか……。

そんな心配に、君雄がいい加減疲れた頃、部屋の真ん中で仕切られたアコーディオンカーテンから声がした。

「沼沢君、できたけど……」

「え？ あ、ああ」

君雄はごくんと生唾を呑み込んだ。

「じゃ、出て来いよ」

「やっぱり……、恥ずかしいな」

「いいから。なんだったたら、僕の方がそこまで行って、開けようか？」

「そんな……いいよ。笑わないでね」

「ああ」

と、アコーデイオンカーテンの中央が割れ、そこから……。

「……えっ」

その瞬間、君雄は、無意識に椅子を立っていた。

そこにいたのは、美少女——君雄がこれまで見たことのないような、掛け値なしの美少女だった。

背中の中ほどまで、ふわりと広がった長い髪。恥ず

かしげにうつむいているのに、カールされたまつげの動きだけでそのかわいらしさがわかる顔。

パステルオレンジのミニのワンピースはハイウエストで、細い体のラインをきわだたせている。そしてなにより君雄の目を奪ったのは、スカートから伸びた、そのきれいな脚だった。

「お前：：ほんとに：：早坂？」

思わず口をついて出た君雄の問いに、美少女はちよ

つと顔を上げ、またすぐうつむくようにして、うなずいた。

「……驚いた」

君雄は、そう言ったきり、ポカンと口を開けて、しばらく智志を見ていた。

「もう……いいでしょ？」

君雄がずっと何も言わないので、場が持てなくなつた智志はそう言い、またカーテンを閉めようとした。

「あ、ちよ、ちよっと待って」

君雄は思わず智志のそばに近づいた。

「……なに？」

はじめてちゃんと顔を上げ、見つめてきた智志に、君雄はどぎまぎした。

「あ、その……、あれだけ時間をかけたのに、もう着がえちやうの？」

「だって……恥ずかしい……」

智志は、いやいやをするように、ちよつと肩をゆす
つた。

「も、もう少し、そうしてろよ」

「だけど、沼沢君、いやじゃない？」

「そんなこと、ない。僕はもう、びっくりしちやって
……」

「やっぱり、気味悪いんだ」

「ちがう！」

君雄が強い口調で言ったので、智志はまた、その大きな瞳で見つめてきた。

「早坂、お前、かわいいよ。これまで僕が見たどんな女の子より美人だよ。あんまりかわいいんで、僕は：
：とにかく、びっくりしちやっただ」

君雄は勢い込んでそう言った。

その言葉に、智志の頬がみるみる紅潮した。そして、両腕を体の前で交差するようにして、恥ずかしげにう

つむいた。君雄の目は、その愛らしい仕草に釘づけになった。

どのくらいそうしていただろう。

やっと顔を上げた智志が、言った。

「……ビール、飲もうか？」

「……う、うん」

二人ともその言葉をきっかけに、大きなため息をひとつつき、君雄はソファベッドに腰をおろし、智志は

キッチンへ行つて、冷蔵庫を開けた。

今度はちゃんとトレーにのせてビールを運んでくる智志を、君雄はずっと目で追っていた。

トレーをライティングテーブルに置く時、君雄の目の前で、智志のスカートフレアがふわりと揺れた。

智志はプルトップを開けてから、君雄にビールを手渡してくれた。その指先には、ワンピースと揃いの色のマニキュアが塗られている。

智志は、自分のぶんの缶を開けると、ちよつとはにかんだような表情をして、君雄のとなりに腰掛けた。

君雄はなんとなく硬くなつて、ビールを飲んだ。ときどき、智志のワンピースの肩が、自分の肩に触れる。

智志の正体は知っているのに、真夜中に、閉め切った部屋で、こんな美少女と肩を並べているという「事実」に、どうしても緊張してしまふのだ。

ビールを飲み終わった時、君雄はもつととんでもな

いことに気づいた。見ると、パジャマのズボンの前が、張り出している。君雄の若い肉体は、その「事実」に、本人の意識以上に敏感に反応していた。君雄はあせつて、それとなく手で前を隠した。

と、智志が言った。

「ねえ、ほんとに僕って、気持ち悪くない？」

「あ：：ああ、ほんとだって」

君雄は、智志の方を向いて、あわてたように言った。

「女の子に見える？」

「見えるよ。じやなかったら……」

（……こんなふうにはならない。）

君雄は、ついそう言いそうになって、あわてて口をつぐんだ。しかし、気にしていたせいもあって、視線だけはそちらを向いてしまったようだ。智志が、つられてそれを見た。

「……あ」

智志が小さな声で言ったのが聞こえた。君雄は、おたおたとして、あらぬ方向に目をやった。智志もまた、あわてて視線をそらせた。

また、沈黙の時間がつづいた。

しばらくして、やっと気持ちが悪落ちついた頃、智志が言った。

「ありがとう。さっき、すごくうれしかった」

「……えっ？」

「あ……うん、そうじゃなくて、僕のこと、かわい
いって言うてくれた時」

「……あ、ああ」

「僕、こんな格好、人前でするの、初めてだったから
……」

「うん」

先刻から智志の方を見ないようにしていた君雄だっ
たが、智志の言葉に、その顔をまたどうしても見たく

なつて、そちらを向いた。

智志の大きな瞳が、恥ずかしげに瞬いた。白い肌にまつげの翳が揺れた。

「……なんか、僕、変な気になりそう」

自分の気持ちをはぐらかすために、君雄は、冗談めかして言った。

「……なろうか？」

智志が言った。

「……え？」

「……変な気」

智志は、伏し目がちに、しかし挑発的な眼差しで、君雄を見返してきた。

そのとたん、君雄は理性を失った。智志を抱き寄せ、ルージュが塗られたその唇に、自分の唇を押しつけていた。

「……あっ」

智志は小さく叫んだが、抵抗はせず、すぐ、君雄の背中に腕をまわしてきた。

君雄の舌が、智志の唇を割って入る。智志もそれに応え、舌をからめてきた。

やがて、智志の体をまさぐっていた君雄の手が、そのワンピースのファスナーを下ろし、脱がせはじめた。

智志は、それに合わせるように、ソファベッドの脇に手をまわし、レバーを引いた。ソファの背もたれが

ばたんと倒れ、セミダブルのベッドに姿を変えた。二人は、その上に、投げ出されるように重なり合った。

そばの床に座った小犬だけが、それを見て、不思議そうに首をかしげた。

窓から射し込む陽の光は、すでに高い角度になって
いる。

フローリングの床に、パジャマが脱ぎ捨てられ、一

匹の小犬がその下にもぐり込んで寝息を立てている。

布団もないベッドの上では、全裸の少年とスリッパ姿の少女が抱き合って寝ていた。

まどろみの中で、ちよつと体を動かした少年は、急に背中を反らすような仕草をし、目を開けた。背中に何かがあたつたのだ。少年は片手をまわし、ベッドの上には放り出されたままになっていたその小さな広口瓶を取って見た。

その動きに、少女も目を覚ました。

「……ん？ どうしたの？」

「……スキンクリーム。ほとんどからになっちゃったね」

「……ばか」

少女は頬を赤らめ、少年の胸に顔を埋めた。少年は微笑して、少女のウィッグの長い髪を撫でた。

「痛かった？」

「そりゃ。……僕、初めてだもん」

「そんな格好で『僕』なんて言うなよ」

「……あたし？」

「そう。さとみは、女の子だろ」

「え、さとみ……？」

「智志だから、さとみ」

「ふ……なんか……うれしい。ぼ……あたし、君雄

君のこと、大好き」

智志はそう言うのとキスをねだってきた。君雄はその唇に軽く触れ、言った。

「さとみ、すごく、よかったよ」

「……もう」

智志は、すねたような顔をしてみせ、それから、ちよつと心配そうに聞いた。

「でも、後悔……してない？」

「馬鹿、そういうのはふつう、男の方が聞くんだぞ」

君雄は、智志の体を抱きしめ、今度は強くキスした。そして、そのまま寝返りを打ち、智志の体を組み敷いた。

「ね、：：もう一回、いい？」

唇を離すと、君雄が言った。

「えっ、また？」

「だって、ほら」

君雄は、智志の手をとると、自分の下腹部に導いた。

「うわ。：：うふ、ゆうべこの部屋に入ってきたときは、失恋して、あんなにしよんぼりしてたくせにね」

「あ、言ったな」

「：：やん」

君雄が首筋に乱暴にキスしてきたので、智志は悲鳴とも歓声ともつかない声をあげた。

その日以来、君雄と智志の「関係」は以前にも増し

て親密になった。君雄は智志のマンションに毎日のように足を運んだ。一日の最後の講義がいつしよだったりすると、二人で、智志の部屋に直行するようなこともよくあった。

二人だけで過ごす時、智志はさとみに変身した。君雄は、時に優しく、時に激しく、さとみを抱いた。

もちろん二人は、自分たちの「関係」が、世間から見ればまともでないのは、じゅうぶん承知していた。

しかし、そんな世間の常識などけしとんでしまおうほど、二人にとって、この「関係」は魅力的だったのだ。

さとみになった智志は、生来の優しさと上品さを残したまま、智志の時には影をひそめている奔放さが加わった。それは君雄にとって、ずっと追い求めていた、理想の女の子のタイプだった。

智志の方は、君雄が、自分のことをそんなふうにな女の子として扱ってくれることが無性にうれしかった。

それは、彼が幼い頃からひとり秘かに持ちつづけたフアンタジ―の具現化だった。

やがて梅雨の季節になり、大学も夏休み前で休講が増えると、二人は一日中その部屋で過ごすことが多くなった。

そして、その頃、二人の「関係」は、さらに劇的に変化した。

「さつきから、なにやってんの？」

タンクトップに短パンという姿でベッドに寝ころんだ君雄が聞いた。

「ん？　：：えへ。ほら」

テーブルに向かって、なにかごそごそやっていた智志が振り向いた。その手には、あの夜以来この部屋に住み着いてしまった例の小犬が抱かれている。

「チロにリボン結んであげたの」

智志からチロと名づけられたその小犬の頭には、大きい真つ赤なリボンが揺れていた。

「ばーか。チロはオスだろ」

「あら、男の子がかわいいカッコしちや、いけない？」
智志はいたずらっぽいで、君雄を見た。

細い肩からずり落ちそうなオフショルダー気味のT
シャツ。グリーンのグラデーションがきれいな綿スカ
ート。シンプルなぶん、智志の美しさが際だって見え

る。

君雄は、そんな智志を見ながら、にやりと笑って、ベッドの上から片足を伸ばした。

その足の先が智志のスカートの中に滑り込む。

「あ：：、もう。君雄君ってエッチなんだよ。でも、女の子は、そんなムードのない挑発には、のらないものね」

智志は、チロを目の前に差し上げ、話しかけている

のだ。どうやら、君雄を無視しようという作戦らしい。

君雄は、面白そうに、体をずらしながら、足先をさらにスカート奥へもぐり込ませていった。

「チロ、どう思う？　男の子ってやーね。あのことし

か、考えてないの。あっ……。さつき、したばかり

なのにね。あたしたち女の子は、女の子どうしお話し

しましよ。あんっ……。もつとロマンチックな……、

ああん……」

「なにやってんの。早くおいでよ」

君雄が言った。

「……もお、」

智志は、チロを床におろすと、まるでダイビングでもするのように、君雄に抱きついた。

「大好き」

二人はキスしながら、ベッドの上をころげまわった。やがて、お互いの体をまさぐり合っていた手が、下

半身に向かう。君雄の手は智志のスカートをまくり上げ、そして、智志の手は、君雄の短パンの中に滑り込み、その部分をさすり合う。

さすがに、先刻激しい一戦を交えたばかりなので、一気に燃え上がったりはしない。ゆったりとした愛撫をしながら、会話を交わすゆとりもある。

「ね、さとみって、この頃、すごく感じてるみたいだね」

「えっ？」

「……入れたとき」

「あ、そういう質問には答えないもん」

「でも、さっきなんか、僕よりずっとすごかったみたい。女の子の方が、感じるのかな？」

「あたしに、ふつうの女の子のことなんて、わかんないわ」

「僕が聞いているのは、さとみのこと」

「うふ：：そう、ね、最初は痛かったけど、コツがわかってきたら、この頃は、ね」

「：：ふうん」

「：：あれえ？　もしかしたら：：」

「なに？」

「君雄君、されてみたいんだ」

「え：：いや、そういうわけじゃ：：」

「そうかあ：：、そうよね。あたしもこの頃、思っ

たんだ。いつもあたしぼっかりしてもらって悪いなつて」

「そんな。さとみだって、僕のをくわえてくれたりするじゃない」

「あら、そんなのより、ずーっといいんだから」

智志は、いたずらっぽい目で、君雄を見ながら言った。

「……そうなの？」

君雄は、ちよつと浮かない顔でつぶやいた。

「ほら、やっぱり。ねえ、君雄君も、チロミたいにしてあげようか？」

「えっ？」

「女装して、メイクして」

「そんな、：：やだよ」

「一度、女の子の気分、味わうのもいいわよ」

「いいよ。おかしいよ、僕なんて」

「そんなことないって。君雄君とあたしは似てるのよ。」

あたしに似合うものが、君雄君に似合わないわけないじゃない。ね、やってみようよ。きつとかわいくなるわ」

智志はそう言って、愛撫の手を離すと、君雄の顔のメタルフレームの眼鏡をはずした。

いつもはどちらかと言えば君雄の方がすべてをリードするのに、今回ばかりは、君雄は智志の言いなりだ

った。

智志の指示に従って脱毛クリームで全身を脱毛し、髭もきれいにあたった。

そのあと智志は、君雄にシェープパンツをはかせ、パッドが入ったブラジャーをつけさせ、スリッパを着せた。

初めて自分の肌をおおった、その柔らかな下着の感触に、君雄のそこは、すでにいきり立っていた。

智志は、鼻歌を歌いながら、さも楽しそうに、君雄にメイクした。そして、クローゼットの中から、あの最初の夜に自分が着ていたパステルオレンジのワンピースを出す、君雄に着せた。

最後に、ふたつ持っているウィッグのうちの一つ——その日、智志はウェービーだったから——、ストリートヘアのウィッグをかぶせた。その髪に軽くブラッシングし、形を整えると、智志は君雄を立たせた。

「ほら、見て」

「えっ……」

クローゼットの扉にとりつけられた姿見を見て、君
雄は呆然とした。

そこにいるのは、まさしく「あの夜の美少女」だっ
たからだ。

「……これが、僕？」

「こら、そんな格好して『僕』なんておかしいぞ、き

・み・よ」

「え？」

「君雄だから、きみよ」

智志は、いつかの君雄の言葉を真似て言った。

智志は君雄の後ろに立って鏡を見ていた。だから、鏡には二人の顔が並んでいた。ヘアスタイルのちがいを除けば、その顔は、まったくコピーしたようによく似ていた。

「……それで、きみよは、女の子になつて、どうされたいんだっけ？」

智志は君雄の体に腕をまわし、いきなりふたつのふくらみをつかんできた。

「……あっ」

君雄は驚いて、とつさに自分の手をその上に重ねた。そのせいで、智志の手が、シリコンパッドでふくらんだバストを揉むのが、よくわかった。

君雄は、思わず肩をすくめるようなポーズをとっていた。その首筋に、智志が唇を這わせた。

「……あっ」

「ほら、ね。女の子になると、感じ方まで、まるでちがうでしょ」

智志は、耳もとへ息を吹きかけるようにして、そう言った。

君雄の体は、そうしようと思わなくてもくねるよう

に動いていた。揉まれているバストの背中側には、それと同じ感触が押しあてられていた。そして、腰のあたりには、何か固いものが……。

「見て。あたしたち、きれいよ」

鏡の中では、二人の美少女が、昂然とした表情で体をゆすっていた。

「あたしたち、人魚みたいね」

「……人魚？」

「そう、男でも女でもない、人間でもお魚でもない：
」

智志の手が、君雄のミニのスカートに裾にかかった。

「……ああ、僕……」

「そうじゃないでしょ、きみよ」

「……あ、……あたし……」

君雄は自分の口から初めて出たその言葉に突き動かされるように、首をひねり、智志の唇を求めた。

ルージユの塗られた唇どうしが重なり、二人はそのまま、ベッドの上に倒れ込んだ。

今は、誰も知らない海の底で秘かにたわむれる、美しい双子の人魚姫たち。

彼女たちにも、冒険の季節、夏は、もうすぐそこまでやってきていた。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

ジェミニ・マーメイド

Gemini Mermaid

<公開版>

CopyRight 1992 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500